

特集1 世界は国際年をどう迎えたのか

国際協同組合年を迎えて、世界各国の協同組合関係者と協同組合研究者はさまざまな会合・行事を開催した。ここではそのなかでも最も大規模な催しとなった、10月29日から11月2日に英国・マンチェスターで開催された「団結する協同組合（Co-operatives United）」の様態をレポートしよう。国際協同組合同盟（ICA）とイギリスの全国連合会（Co-operative UK）との主催によるこの催しは、ICA 総会のほか、協同組合エキスポ、各種ワークショップ、映画上映会等々、多彩な内容で、全世界から753の協同組合が参加、参加者は計1万1300人に達したという。以下では、世界中から集まった協同組合関係者と、それを迎えたイギリスの関係者がいかにこの国際年記念行事を展開したか、写真入りで紹介する。今後日本の協同組合が「協同組合の10年」において何ができるのか、あるいは何をしなければいけないのか、このイベントは多くのことを示唆しているように思われる。

なお、このほかに各国で開催された国際研究会議などの情報は、折にふれて本誌次号以下で取り上げたいと考えている。

Co-operatives United に 参加して

杉本 貴志（関西大学商学部教授）

概要

「団結する協同組合は、世界のあらゆる地域の協同組合が集まった、協同組合界におけるここ数十年で最大のイベントでした。それは国際協同組合年の頂点にふさわしいものでありました。」

このポール・グリーン ICA 会長の評価にあるように、5日間の一連の行事は、ともすれば儀式的な、機械的に日程を消化するだけとなりがちな大規模国際行事の通例とは異なって、実に実り多く、参加者を魅了する催しだったと筆者は感じている。参加前は、参加費だけでも485ポンド（約6万円。展示を見るだけなら無料で、すべ

ての会議に参加するための費用）ということで、なんと高価な催しなのかと正直あきれかえったものだが、現在では、交通費や宿泊費を合わせて数十万円の支出を強いられたにもかかわらず、それでも参加して本当によかったと感じている。個人的に、これほど充実した催しはこれまで経験したことがないと言っていると思っているが、同行した学生も、初めての国際集会への参加であるにもかかわらず、この行事に非常に感動し、有益に感じていたようである。客観的に見ても、規模だけでなく内容において、これはまさに国際年の頂点に位置づけられる行事だったといえるだろう。

一応、協同組合のことを専門のテーマと



主会場となったマンチェスター・セントラル

している身であるが、「へえ、協同組合ってすごいんだ…」と会場で思わず門外漢のような感想を抱いてしまった筆者であった。

各種会議

このイベントのひとつの柱は、ICA やイギリスの協同組合運動による、大小さまざまな各種会議である。紙幅の制限があるから、型どおりの来賓や演者、プログラムの細かな紹介は別に譲ることとして、オープニング・セレモニー、ICA 特別総会、ジェンダーフォーラム、協同組合コンGRES、価値と原則の会議、フェアトレード会議、閉会イベントと続いた諸会議の中で、私的に印象強かったことだけを述べることにするが、開会式における国連食糧農業機関の Graziano da Silva 事務総長による「協同組合運動にノーベル平和賞を」という祝辞は、ある程度はお世辞や儀礼も含まれて

いるのだろうけれども、それでも協同組合運動の第三世界における影響力の強さを再認識させるものだった。どうやら本気でノーベル賞に推薦しようと考えているようなので、ひょっとしたら数年後、そんなニュースが世界を駆けまわるかもしれない。

また、伝統の協同組合コンGRESや閉会イベントで、各国の協同組合運動の重鎮と



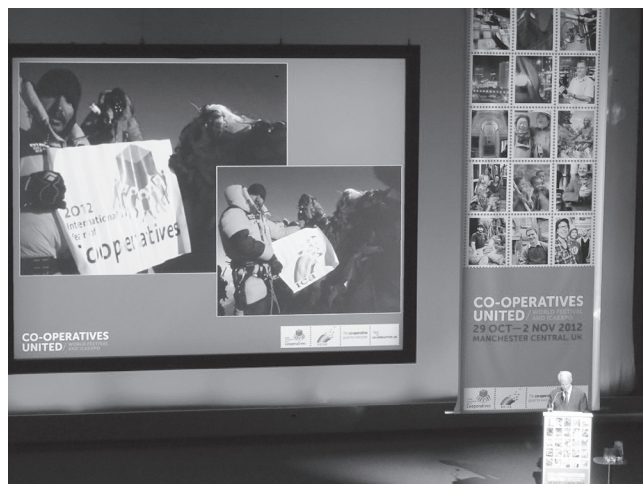
シンガポール協同組合連合会代表、ICA 会長とクリステン・クリスティアン (バンク・トランスファー運動創始者)



銀行から協同組合へと訴えるクリスティアン

並んで壇上にひとりの若い女性の姿があるのが印象的だった。まだ20代の若い女性が大規模な集会で中心的なゲストのひとりとなることなど、日本の協同組合運動ではなかなか考えられないことではないかと思うが、この女性は Kristen Chiritian、アメリカで巨大金融資本、大手銀行の横暴に抗議して、こうした銀行の預金口座を解約して協同組合の口座に預け替えようと立ち上

がり、「バンク・トランスファー（銀行口座を移そう）」運動を組織して、アメリカ社会を大きく動かした人物である。世界中の協同組合関係者が集まる集会に、壇上に並ぶ数名の一人としてこういう女性を招き、その体験談を語ってもらうという演出の中に、グリーン会長ほか ICA やイギリス協同組合運動が協同組合をどう考えているのか、何を世界にアピールしたいのか、



国際協同組合年の旗がエベレストの山頂にも掲げられたという報告



閉会イベント

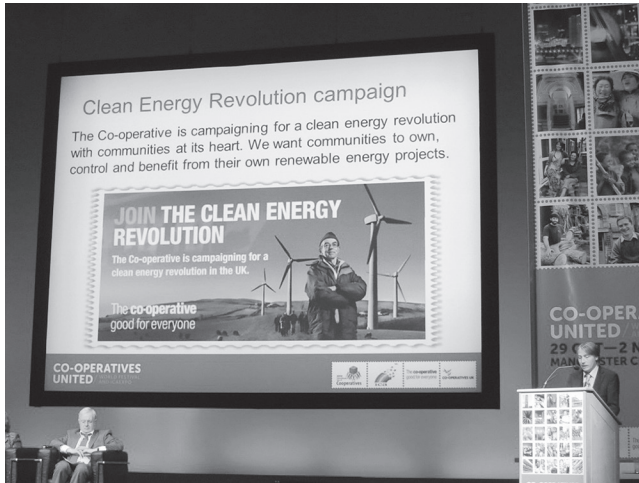
その意図を感じることができよう。

また、価値と原則の会議は、イギリス協同組合運動における組合員活動フォーラムというべきものであるが、これに参加してみれば、日本の生協とは違って単なるスーパーマーケットではないかという印象を抱きがちなイギリス等ヨーロッパの協同組合においても、実は非常に熱心な活動が存在するのだということをあらためて認識させ

られる。今回はとくに風力発電等々エネルギー関係の取り組みを生協が積極的に取り組んでいることが紹介されていたが、これはなかなか強力な運動ではないかと感じた。日本の生協では、組合員の集会といえば、そのほとんどが女性であるが、イギリスの場合は男女が半々、あるいはちょっと男性が多いくらいで、こうした集会での発言者はほとんどが男性である。これについ



韓国ブースでの韓国産コシヒカリのアピール



再生可能エネルギーの普及を訴える協同組合

てはいろいろ評価があり得るだろうが、「食の安心・安全」など身近な消費生活から問題を提起することが多い日本の生協組合員とは対照的に、「食」の問題などには全く触れず、政治的・社会的問題に抽象的に斬り込んで協同組合運動の理想や大義を語る英国の組合員の姿は、なかなか興味深いものである。

大ホールで開催されるこうした大規模な会議のほかに、本イベントではテーマ別に多数のワークショップが開催されている。サッカーチームを協同組合方式で運営する方法について語るワークショップ、フェアトレードと生協を考えるワークショップ等々、3日間、5会場に分かれて100以上のワークショップが開催され、それぞれにおいて協同組合運動の研究や実践や交流が進んでいた。

エキスポ

本イベントにおけるもう一つの柱が、協同組合の万国博覧会、コー

プ・エキスポである。

アジア地域からも、中国、韓国、シンガポール、マレーシア、インドネシア、インド、イラン、パレスチナ、東チモールといった大国や小国が参加し、自組合のオリジナル商品等を展示しているのは見ているだけで楽しく、勉強になるが、ここで誰もが感じるのは、「なぜ日本は参加していないの?」ということだろう。事実、各国のブースで筆者が日本人だとわかると、そういうことを何度か言われた。

おそらくは、参加料が高くて実利が少ない（別に日本の協同組合の製品・産品を外国に売り込んでもしょうがない）というような理由ではないのかと想像するが、もしその想像が当たっていたとしたら、何とももったいないことだ、と感じざるを得ない。

いま日本は震災後の復興と、原子力発電所の事故で、世界から大きく注目されている。誰もが日本の協同組合からの報告が聞きたいだろう。福島や東北の農林漁業はこういう目にあったけれども今はこうだとか、生協はそれをどう支援しているとか、



協同組合スクールで体験学習

生産者の協同組合も消費者の協同組合も発信すべきではないのか。何より、各国の協同組合から日本は大きな支援を受けたはずである。そのお礼として、なぜ出展によって現状をアピールするという発想が出てこないのか、不思議に思う。前例がどうであろうと、日本の協同組合からそのような申し出をすれば大歓迎されるのに、と思わずにいられなかった。

また、もうひとつ強く感じたのは、このイベントが若い世代あるいは子どもたちのことを強く意識した企画となっていたことである。イギリスでは協同組合スクールが発展を遂げていることも反映しているのだろうが、会場内にも子供向けのコーナーが多数設けられ、一家で楽しめるイベントとなっているのである。ロッチデール以来、協同組合の命は教育だといわれるが、それをまさに体現した国際イベントとなっていることにも日本の協同組合関係者にはぜひ注目していただきたいと考えさせられた光景だった。

日本への教訓

そのほかにも、新装になったロッチデール博物館の見学など(24 ページ参照)、さまざまなイベントが企画され、来場者に役立つ情報を提供しよう、彼らに楽しんでもらおうという努力がひしひしと感じられた5日間であったが、こうした多彩な内容のイベントを満喫した後、国際年における日本の状況を考えると、正直なところ、どうしてもいろいろな不満を抱いてしまう。

まず、ここまで大規模にはいかなかったも、もっと各種協同組合が団結して取り組む一大イベントが当然企画されても良かったのではないかということである。日本で開催された各種行事でこのイベントに最も近いものは、11 月に大宮市で開催された協同組合フェスティバルではないかと思うが、このフェスティバルはあくまで労働者協同組合が中心となったイベントであり、あれだけの催しを企画し、実行した労働者協同組合の方々の尽力は敬服に値するとしても、農協や生協など、強力な既存の各種協同組



巨大な絵本でロッチデールの勉強



会場内では各国のフェアトレード製品が
大々的に展示され、販売されていた

合が組織として全面的に協同して成り立たせようとしたものではなかったように思う。

このすぐあと、11月末にはアジア太平洋地域のICA総会とそれに関連する各種会議が神戸で開かれたから、これをこのCo-operatives Unitedのように、ICA総会に合わせた開かれた企画とすることも可能だったはずである。しかし、そのようなことは全く議論されなかったようであり、各種会合はいつものように関係者だけの内輪のものとして開催されたようである。

「ようである」というのは、実際にどのようなものであったのか、地元関西で開催されたにもかかわらず、くらしと協同の研究所にはこれに関する情報が全く何も届いていないからであり、各種会議の中には、いつもは論文の募集や参加の受付がホームページ等で行われ、大学の研究者等にもオープンに開かれている研究フォーラムがあったはずだが、この研究フォーラムに関する情報も、少なくとも筆者の周辺には全く届いていない。いったいどのようなテーマで開催されたのか、いつどのように論文発表の受付がなされたのか、どうすればこ

のフォーラムに参加できるのか、ホームページ等を検索しても全く情報は得られないのである。

協同組合研究の最新情報に最も詳しいと思われる東京の研究者に「あれはどうだったのですか」と尋ねてみたが、その方も何もご存じなかったから、筆者とその周辺だけが情報を見落としていたというわけでもないようである。せっかく協同組合研究に関する学会や研究会が多数組織され、協同組合研究を使命とする研究所も多数設立されているというのに、その総力を結集するような体制が国際年に組めなかったのは実にもったいないことだというのは、筆者個人だけの感想ではないと思う。

これから日本の協同組合研究が考えなければならない大きな課題ではないだろうか。